

③トークセッション

平成と令和の大礼を振り返る

登壇…京都産業大学名誉教授・京都宮廷文化研究所特別顧問

宮内庁元侍従・前掌典長

司会…京都産業大学法学部准教授・京都宮廷文化研究所代表理事

所 楠 本 祐 一 功
久 禮 旦 雄

○久禮 それでは、トークセッションに移りたいと思います。よろしくお願ひいたします。

まず、所先生、楠本先生、それぞれからお話をいただきましたけれども、トークセッションへ移る前に、ご講演について少し補足などございましたらお願ひいたします。まず所先生の方から。

○所 では、失礼します。どうも長い間、聴いていただいて、お疲れの方もありますが、もうしばらくお願ひいたします。

今日は、楠本先生から、可能な限りいろいろお話をいただきたいという趣旨でございますが、私の方からは京都産業大学に長くいたからではなくて、歴史家として日本全体を考えると、京都の重要性について、とくに申し上げたいわけがあります。本当に京都が京都であるということは、やっぱり重要なことだと思っ
んですね。

政治都市、経済都市としての東京と、文化都市、観光都市としての京都、それぞれの長所をどのように発

揮しながら、日本全体のキャピタルとして機能するかということ。こんなことは、「双京構想」を打ち出された平成二十二年以前から、いろいろな人が言ってこられました。いまなお十分に行きわたっておりません。

この構想で注目されるのは、皇室の方々が、東京だけではなくて、なるべく京都へお越しになり、できれば長くご滞在いただきたいということです。いま三笠宮家の彬子女王は、京都にお住まいでして、いろいろな活動をしてられます。不思議な縁があつて、京都産業大学に籍を置かれています。現役の宮家皇族がどのようなお働きをなされるか、従来なかったことでも、ご自身が女王の立場で何ができるか、何をすべきかを考えてやっておられることは、まことに重要な意味があると思います。

このような例もあるわけですから、それのみならず、もつと皇室の方々にお出ましいただける、場合によっては逗留していただける機会をつくることは可能だと思われれます。ただ、そのためには、京都側でほぼ準備をし、熱意を持つて要望しませんと、宮内庁であれ政府であれ、なかなか動き出さないとみられます。

ほとんどの官庁は、やっぱり国民の声、市民の声を受け、それに応えるかたちで動きだすわけですから、何としても京都市民、京都府民の、もつと言え、関西の有志、全国の有志からの熱意を示さないと、そういうこともなかなかできません。

これは、双京構想の会議などで、何度か言ってきたことであります。そのことをふまえて、一つの提案を申し上げます。今回、「大嘗祭」のお祭りそのものは、先ほど楠本先生から承りましたように、今上陛下がまさに全身全霊を込めて、悠紀殿の儀、主基殿の儀をなさいました。その後、大饗もありました。

大饗というのは、広い意味で祝宴と言つてよいと思いますが、そのときに屏風絵も屏風歌も出されていま

すが、その歌をおつくりになったのが、京都産業大学名誉教授の永田和宏先生であります。

永田先生は、長らく宮中歌会始の選者も務めておられる著名な歌人ですが、今回も選ばれて、主基国となった京都の風景を詠み込んだお歌をつくられました。それを屏風絵に描かれたのは、日本画家の土屋礼一さん（金沢美術工芸大学名誉教授）です。今日は大サーブスで、この悠紀と主基の屏風絵のカラーコピーを参考資料として皆さまにお渡ししています。

今回は、京都の南丹市で主基斎田をお引き受けいただきました。ただ、この屏風を拝見しますと、歌も絵も申し訳ないくらい京都市内が多く詠まれ描かれております。やっぱりこれは京都にとって大きな意味あることだと思えます。

大饗のとき、両陛下の御座のすぐ前に、洲浜というものが置かれました。悠紀国の栃木と主基国の京都を両方合わせた作り物です。今回、栃木と京都が力を合わせてご奉仕させていただいたことを如実に示しており、本当に名誉なことなのです。その名誉と意義をしっかりと再認識をして、今後にも引き継いでほしいと思っております。

そのような意味で、この京都の名所を詠まれた屏風歌と屏風絵を、宮内庁に許可をえて、できれば原寸大の精密な複製（レプリカ）を作成し、他の大礼関係資料と共に、京都府か京都市の美術館あたりに常設展示をして頂きたいと念願しております。

○久禮 ありがとうございます。では、楠本先生の方から補足などございましたら、よろしく願います。

○楠本 私の方から、宮中祭祀、大礼の行事のお話を申し上げたんですけども、宮中祭祀における女性の役

割を、ご説明したいと思います。

大嘗祭のときも、皇后さまのお出ましはございました。通常の宮中祭祀のときも皇后さまがご出席になる祭事があります。ただ、皇后さまが宮中祭祀に明確なかたちで関与されるというのは、やはり明治以降ではないかと思われま

す。明治になってからは、近代国家をつくろうということで、欧米諸国の例も見ながら、宮中祭祀についても陛下のみならず、皇后さまもしかるべき役割を果たされるべきだということになったのではないかと思

います。今回の大嘗祭についても、主役は陛下と申し上げていいかと思いますが、皇后さまも皇后としてのお役割を果たされました。

皇后さまの動きですが、陛下のお列の後に続いて皇后さまもお出ましになります。皇后さまの後ろには、女性の皇族方がお付きになります。皇后さまは帳殿という場所にお入りになって、悠紀殿あるいは主基殿で陛下のご所作が始まる前に拝礼をされます。皇后さまは、ご拝礼のあと退出されます。

そのようなかたちで、近代以降の大嘗祭には、皇后さまのお役割がはっきりと決まっています。

通常の宮中祭祀の場合は、陛下、皇后さまは殿上で御拝になります。その場合は陛下がまず御拝をされて、陛下のご退出後、引き続き皇后さまが殿上にのほられ、御拝をされるということになっています。

両陛下のご拝礼後は、秋篠宮同妃両殿下が皇嗣同妃両殿下ですから、お二人がおそろいで殿上で拝礼されることとなります。

ですから、殿上で装束を付け、拝礼されるのは天皇陛下、皇后陛下、皇嗣殿下、皇嗣妃殿下の四方だけです。

あとの皇族方は、幄舎で着席され、男性皇族はモーニングで拝礼され、女性皇族は祭事用の洋装で拝礼になります。

また、宮中三殿には、女性の内掌典が奉仕をしています。内掌典の役割というのは、基本的に三殿の控室に寝泊まりをして、朝早くから、三殿での日々のご奉仕をしています。

大嘗祭、新嘗祭のときの女性の役割についてですが、采女（うねめ）が陛下の手足として、ご奉仕をします。例えば、陛下が準備された、神饌を神々の前に供えるという役割をします。

采女として大切なお役目を勤めるのは女官さんです。通常、皇后さまの女官さんの中から経験のある方が選ばれます。基本的に新嘗祭、大嘗祭の場合は、内掌典は関与いたしません。内掌典さんの役割は日々の三殿のお世話をすることです。

いづれにしても、女性の役割というのは、宮中祭祀でも大きなものがありますし、今後とも、そういう女性の役割が継続していくと思いますし、女性の役割を無視して宮中祭祀というのは、私はあり得ないと思っております。

○久禮 どうもありがとうございます。

ちよつと図を出しておりますけれども、このようなかたちで、陛下はこちらの、少し斜めになっている御座のところいらつしやるわけです。そこで、神座の前にご神饌を並べられる。この図でも、後ろ側（図では上と下の方）に采女がいることになっております。これが、いま楠本先生からお話のあった方々ということになります。

○所 ちよつとごいましてありがとうございますから、皆さん、よく見てください。陛下の御座と陛下の前のご神座が少し

斜めになっています。これに「伊勢神宮の方向」と書かれてありますのは、大嘗祭も新嘗祭も、伊勢神宮の天照大御神に向かつてお祭りをしておられる、ということがよく分かります。皇室にとつても、わが国にとつても、伊勢の神宮、天照大御神がいかに重要な存在かということを知ることができます。

今日もお越しいただいております、城南宮の鳥羽宮司さんも研究者ですが、その祖父にあたられる川出清彦という先生は、長らく掌典として宮中祭祀に奉仕され、『祭祀概説』という名著を公刊しておられます（學生社）。それを拝見しましたが、宮中祭祀の基本は、天照大御神に対するお祭りであり、併せて天神地祇、全国的神社にお祭りされているような神々への祈りだということが、よくわかります。それゆえに、大嘗祭の悠紀殿と主基殿の神座も御座も、伊勢の神宮に向かつて設置されているのです。

○楠本 皇室と伊勢神宮との関係は、非常に緊密なものがあります。新嘗祭は宮中の行事なのですが、神宮でも新嘗祭のお祭りをします。

そして、神嘗祭は神宮のお祭りなのですが、宮中祭祀でも、神嘗祭を十月に行います。

神宮で、その年に取れたお米を、天照大御神にお供えをして感謝をするというのが十月中ごろの神嘗祭なんです。

宮中祭祀では、神嘗祭の日にも、陛下はまず賢所という、天照大御神をお祭りする御殿に入られるに先だつて、神嘉殿という別の御殿で、神宮の方に向かつてご遙拝をされます。はるかに拝むということです。それから、賢所に入って御拝礼をされます。また神嘗祭に先立って、陛下お手植えの稲穂を伊勢に送られます。そして、伊勢神宮の垣のところに掛けられます。

また、元旦の朝五時半からの四方拝の儀も、まず神宮の方に向かつて拝礼をされます。このことから、

いかに宮中祭祀と神宮との関係が近いかということかと思えます。

○久禮　ありがとうございます。

お二人の先生のお話を、非常に興味深く伺いました。いままで、大嘗祭を中心としたお話を伺いましたが、天皇の御代替りの初めに「改元」と「即位礼」があります。この元号を改める改元には、所先生が「平成」の時も今回の「令和」についても、さまざまな報道などに関わられました。楠本先生は平成の代替わりのにきに、侍従として即位礼に関われたと思います。

大嘗祭と共に、改元も即位礼も重要なものだと思いますので、そのあたりを、お二人の先生からそれぞれお話をいただければと思います。

まず、所先生からお願いたします。

○所　失礼します。改元については、いくらでも話したいことがあります。人生というのは不思議なもので、私のような田舎育ちの者が宮中の儀式などを研究するなんていうのは、一種の偶然に恵まれたからです。

昭和三十五年（一九六〇）に大学へ入って国史学を専攻した私は、当時はやっていた社会経済史になじめず、政治文化史に関心をもちました。しかも他人と競いあうことを好まない私は、あまり人のやらないテーマを選んだのです。いまから半世紀以上に、皇室の儀式や行事の研究をやる人は、ほとんどいなかったのです。それならやってみようと思っ取り組み始めたのです。やりだしたら、これは膨大な史料がありまして、それを調べるのは大変でしたが、結果的に、いわば専門になってしまいました。

もう一つ、昭和五十年（一九七五）から六年間、当時の文部省（現文部科学省）に勤めておりました。ちょうどそのころ「元号法」という法律をつくるかどうか大論争になりました。結果的に昭和五十四年（一九七九）

に成立しましたが、そのころ、いわゆる天皇制に直結する元号を廃止すべきだという声が、学界でも論壇でも政界でも、非常に強かったのです。しかし、一般の国民から、やっぱり昭和まで続いてきたものは、次の御代以降も続けてほしい、という声がだんだん盛り上がりまして、いわば国民の声を政府も国会も受け止め、「元号法」ができたのです。

その際、「元号法」法案が国会にかけられたら、どのような賛成・反対意見が出てくるかということ詳しく調べて、想定問答集をつくることに、少し関わりました。それは少し前に『日本の年号』という元号通史を出していた（雄山閣出版）こともありですが、小・中・高の教科書で年号（元号）と西暦をどう扱ったらよいかという問題に対処するためでした。そのときに、「元号の重要性」「元号法」の必要性というものを再認識しました。

さらに昭和五十六年（一九八一）から、京都産業大学に奉職しました。それから七年後、天皇陛下が癌の手術をされ、改元への準備が秘かに始まりました。そのころ、小川環樹という先生が京大定年後、本学の外国語学部に来ておられました。先生は、湯川秀樹・貝塚茂樹両博士のご兄弟で、中国古典の漢文学者として最も著名な方でした。従って、次の元号には、小川先生が案を出されるだろうとみられ、マスコミがいっぱい取材に来たわけです。

しかし小川先生は、そんなこと政府から仮に言われていたとしても、極秘事項でしたから、自宅でゼミなどをやっておられたようです。そのため、記者連中は行くところがないから、それじゃあ元号のことをやっている私のところへちよつと寄ってみようというので、次々と産業大学の研究室へ来たのです。

そこで、従来ほとんど無縁だったマスコミの人々といういろいろな話をする中で、次の御代に向けて、政府や

宮内庁でどのような準備が行われているのかというようなことを聞くことができました。そして、やがて昭和六十四年（一九八九）一月七日、昭和天皇が崩御されますと、NHKの特別報道番組で新元号が決まったときに解説のお手伝いすることになったわけです。

しかも、その縁で即位礼当日にもその解説をすることになったのです。ただ、即位式の解説は、自分一人で十分できないと思いましたが、京都の衣紋のご専門である、先代の井筒興兵衛さんにお助けをいただき、松平アナウンサーと井筒さんと私とで、即位礼の解説をいたしました。

このうち、改元につきましては、先ほど申しましたように、前回は昭和天皇の崩御当日でしたから、たいへんあわただしかったのですが、戦前の「大正」「昭和」の改元に近い形で行われました。しかし今回は、平成の天皇が高齢のため譲位されることになり、それを前提として早目に改元されました。

本来、一世一元の新元号は、新天皇が政令に署名をされてから公布されるべきものです。しかし、今回は、いわゆる生前退位というかたちでご譲位が四月末日に、新天皇の即位（践祚）を五月一日に予定して、それまでに準備をすると称して、四月一日に政令を決め公布までしてしまうことになったわけです。

しかし、これはおかしいですね。当時、まだ今の上皇陛下が天皇としておられ、今の天皇陛下は皇太子でしたから、新元号の政令の署名を平成の天皇がなされたのは不自然です。今後もまた高齢譲位により改元される時は、政府であらかじめ内定しても、その政令に署名されるのは新天皇であり、その公布当日から使用するということに改めてほしいと思っております。

ちなみに、今回「令和」の改元報道は、NHKも民放も、ほとんど久禮さんが私の代わりを務めてくれました。この次の改元はいつか判りませんが、今上陛下は六十二歳ですから、仮に、二〇五〇（令和三十二）

年ころに、御代替わりが行われるとしたら、誰が外から支えられるのか。また中で誰が支えられるのかということは、今からよく考えて段々と準備しておく必要があります。これは単に研究だけでなく、たとえば衣紋やご神饌のことなど、あらゆる事柄を準備しておかなければいけないと思います。

生きた文化の継承というのは、常に然るべき人があり、その人に修練された技術があること。また必要な予算も用意されてこそ、できることです。そういうリアルな認識が関係者に必要だと思います。

先ほど楠本先生が言われましたように、大嘗祭の在り方も含めて、今後これでいいのか、次はどうしたらいいのかということは、今からしっかりと考えて、伝統を踏まえながら本質を失わないように、しかも時流・時宜にかなうようなかたちでやってほしいと思っております。

○久禮 ありがとうございます。

では、楠本先生の方から、よろしく願っています。

○楠本 私は京都の普通の家庭に生まれて、そして、家は仏教なのに、キリスト教の同志社に入学をして、同志社中学、高校、大学と進み、何となく外交官になりたいと思って試験を受けたら、思いがけず合格し、外務省に入省しました。

そして、そのうち侍従という話があり、まったく予期せず侍従になって、2年間御所務めをして、今度は掌典長になれという話で宮中祭祀の仕事をするようになりました。

そういう私の経験を踏まえると、人生というのは、自分で決められるものではないんですね。神懸かりとは言わないし、何かのお導きではないですけども、望む望まないにかかわらず、何か定められた方向に進んで来たというのが実感です。

私はまったく外部の世界から入って、掌典長としてまず思ったのは、こういう特別の、超越した世界もあるんだということです。さあ、頑張ろう、頑張ろうと肩を張らなくても、何となく物事が進んで行く。そして、うまく行かない場合もあるでしょうが、このような何か大きな流れに身を任せるのも、一つの方法かなと思います。

現在、日本の人々、世界の人々は、あれが欲しい、これが欲しい、と現実的な物欲に、あまりにもとらわれ過ぎて、かえって、自分を不幸にしているのではないかと思われます。

人々はいつもスマホを見て、あれが欲しい、これが欲しい、もっとお金が欲しいと欲望は無限です。大富豪で何兆円のお金があっても、不幸な人は不幸です。

ですから、私は掌典長として、宮中祭祀の仕事をさせていたでいて、個人的に一番学んだのは、人間は思いどおりに生きられるものではない。そして、自我、欲望に固執していると、かえって不幸になるということです。

私がそんなことを言うと怒られるかも知らないですけども、超越した神と呼ぼうが仏と呼ぼうが、何か超越した大いなる存在に身を任せるといふようにした方が幸せになるのではないかなと思っております。

ですから、宮中祭祀もまさにそういう意味で、国のため、民のため、心を尽くして祈るといふことに、その本質が示されているのではないかなというのが、私の一番感じるところです。宮中祭祀とは何か古くさい、こけむしたものでなくて、日本国のいま置かれた状況を踏まえて、国安かれ、民安かれとの現実的な天皇の祈りなのですね。

私は掌典長として、いまのタイミングで、陛下がどのようなお考えで祈られているのかと、いつもおそば

で考えているようにしていました。このように宮中祭祀について歴史的な意義とともに、その現代的な意義というのとは、非常に大切であると思うし、この現代的意義について、日本の皆さん方にもっと知っていただく。そうすると、天皇のご存在というのは、もっと近くに感じられるのではないかなという感じがいたします。

それから令和になる直前まで、掌典長として四年近くおそばにお仕えした上皇陛下と上皇后さまが、いかに象徴天皇のあるべき姿を求めて努力されたか。これは、おそばにいても本当に痛いほど分かりました。

昭和天皇は、「大日本帝国憲法」のもとの天皇でもあり「日本国憲法」のもとの象徴天皇でもいらつしやいました。しかし、平成の御代の上皇陛下は、ご即位以降、象徴天皇であつたわけです。

ですから、象徴天皇はいかにあるべきか。常にお考えであつたと思います。また上皇陛下は、昭和天皇とご一緒にお過ごしになられて、昭和天皇が先の大戦のときにいかにご苦労されたかということ、よくご存じだと思つてですね。

宮中祭祀のとき、上皇陛下が常に祈念をされていたのは、世界の平和だと思ひます。それと共に、先の大戦で命を落とした戦没者に対する慰霊、この平和と慰霊のお気持ちが非常に強かつた。ですから、上皇陛下、上皇后さまは、沖縄に何度も行かれ、ご退位の直前にはパラオまで行かれましたし、フィリピンにも行かれました。

私は、特に上皇陛下のもとで象徴天皇のあるべき姿、国のため民のため世界の平和のため、更に戦没者の慰霊についての強いお気持ちを、おそばで痛いほど感じさせていただきました。

それから、令和の陛下、皇后さまは、上皇陛下、上皇后さまのそういうお気持ちをしっかりと引き継いでおられると思います。残念ながら、令和の御代になつた途端にコロナが始まりました、こういう状況ですけ

れども、早晚、新しい御代のもとにおける、いまの陛下、いまの皇后さまのものと、天皇のあるべき姿というものは、少しずつ築かれていくことになると思います。

私は、令和の御代では、上皇さま、上皇后さまがこれまでに築かれた、象徴天皇のあるべき姿をベースにして、さらにそれにプラスアルファで新しいものをつくっていかれると思います。また令和の御代では、世界の中の日本、日本のあるべき姿を世界に示すという視点も必要かと思えます。

今上陛下は、イギリスのオックスフォード大学に留学されていますし、皇后さまも外交経験は豊かでございますから、新しい令和の御代では、いままでの象徴天皇の存在意義に加えて、日本というのはこういう国ですよ、日本らしさというのはこういうことなんですよ、日本人はこういう民族なんですよ、というようなことを世界に示す新しい要素が加わってくるのではないかと思えます。

これから今上陛下、皇后さまの外国訪問も始まっていくと思えますけれども、ご訪問を通じて日本からのこのような重要なメッセージが世界に伝わっていくのではないのでしょうか。いま世界を見ますと大激動期です。経済的にも政治的にも社会的にも大きな変化が生じている。また大事なことは、これまでの欧米のようなお手本がなくなってしまったことなんです。今は中国とかロシアとか、いろいろ欧米とは違ったシステム、考え方の国々が出てきているわけです。

こういう中で日本はどうするのか。日本としても日本らしいお手本を示していかないといけない。そういう意味で、私は天皇のご存在とか、宮中祭祀の祈る心とか、日本の精神文化に根ざしたようなものが非常に重要になると思っています。

精神文化の分野では「和歌のこころ」も重要と思っています。自分の心を五・七・五・七・七の歌に詠み

込む。これは『万葉集』以降、非常に重要な日本らしさのお手本といえます。そして他の人が五・七・五・七・七の和歌の中に詠み込んだ心を自分が読んで共有する。このような「和歌のこころ」は世界でも特長のあるものと思います。

私も掌典長になってから、和歌の世界に関心を持ち、『万葉集』とか『百人一首』とかを一首一首詠んでいきますと、そこに秘められた古人の繊細な気持ちというのは、何百年たっても伝わってくるものがあります。これも日本文化の特色ではないかなと思うんです。

そういう意味で、これから日本が世界に示すべきものは、天皇のご存在とか、国のため、民のために祈る天皇の祈りの心とか、和歌の心とか、そういう精神文化ではないでしょうか。これまでは自動車とか家庭電器でしたけれども、これからは日本の誇るべき歴史的な精神文化、それも外国の人に押し付けにならないように、外国の人にその本質を十分理解いただく。このことが非常に重要だと思います。

○久禮 ありがとうございます。かなりまとめの内容までお話しいただいたんですが、まだ時間がありますので、所先生、いまの楠本先生のお話についていかがでしょうか。

○所 ありがとうございます。楠本先生がおっしゃいましたことで私もつくづく思うことがあります。たまたま機会を得て元の宮内庁長官とか、元の侍従長をなさった方から承ったことなんです。戦後の「憲法」の下で、多くの憲法学者などが象徴天皇は単に存在すればいいんだ、黙って座っておられるにすぎない、という消極的象徴論が多かったけれども、平成の天皇はそうじゃなくて、象徴とはいかにあるべきかということとを、常に積極的に考えてこられた。象徴天皇というのはこうあらねばならないかな、こういうことは「憲法」の範囲内で可能かどうかということ、先ほどおっしゃった慰霊のことも含めて、一所懸命お考えになられ

て積極的になさってきたから、平成の天皇は積極的象徴であられたと言われて、なるほどそうだなと思っております。

その最たるものが、やがて八十歳すぎの高齢になれば、象徴天皇としてのつとめが十分できなくなるおそれがあるから、その前にご譲位をしたいというおぼしめしをすでに内々におっしゃっていた。それが今回ようやく実現したのです。先ほど申しましたように、もしこのことがなければこれほど穏やかに御代替わりを迎えることができなかつたわけです。そういう意味でも、私は誠にありがたいおぼしめしだと思っております。

楠本先生のお話によれば、平成の天皇も今上陛下も、お祭りなどのときのお顔つきは、間近に眺めるとやはり同じではない。そのお方がなさること、その方でしかおできにならないことは、全身全霊を込めて積極的になさっておられる、というふうに受け止めました。

いまの陛下が長年やってこられたのは水問題との取り組みです。私どもは、水がどれほど大事かということとを、あまり認識しませんでした。けれども、やはり水なくして人間は、生物は生きていけないわけです。その問題にかなり早くから関心を持って研究され、国連の特別委員会の名誉総裁などもされ、いまでもその研究を続けておられます。これが世界的な共感とか尊敬を得ておられるわけです。

今上陛下は皇太子のころから水を大事にしておられました。そのほほえましいエピソードが映像に残っています。愛子さまがお小さいころ、皇太子さまが水道の水をちよつと出しておられたら、「お父さん、そんなに水を出しっぱなしでいいの」と愛子さまがおっしゃったのです。これはお小さいころから水を大事にするようご注意ください。霧困気の中で育ってこられたからだと思われれます。いまコロナとか震災とかの中で、水の重要性が再認識を求められている。それに早くからきづかれて研究し発信しておられたのも、今上陛下の積

極的な象徴たる天皇のお役割だと思えます。

幸いなことに私も、平成から令和の今も天皇をいただいていることによって、われわれが単なる目先の、利益だけを考えるのではなくて、もっと根源的に長期的に物事を考えながら生きていくことの重要性をお示しいただいているわけです。それをしっかりと受け止めながら、先へ進みたいと思っております。

○久禮 ありがとうございます。楠本先生は外務省から移られた後で、こういう世界もあるのだと感じられたそうですが、具体的にいままでの論理とは違うという、そういうことにお気付きになったのはどのようなことでしょうか。お尋ねしたいと思います。

もう一つ、先ほど展示を先生方と一緒に見せていただいた際に、着付けでも、侍従の方が付けるのと専門家の方が付けるのでは、ちよつと違うというお話がありました。そこで侍従時代のことを、具体的なエピソードなどお聞かせ願えればと思います。

○楠本 ある日突然、侍従を命ずるということで外務省から宮内庁に転向しまして、まったく別世界で、慣れるまでずいぶん時間がかかりました。侍従で転向してまず驚いたのは、陛下、皇后さまから、同等に接していただいた。これにはびつくりしました。

私に対しても必ず、呼び捨てしないで、いつも「楠本さん、楠本さん」と呼びかけていただきました。勤務して一週間たらずの間に、陛下からお召しがあり、陛下の御座所に入ると、陛下の御前に、机があつて椅子が一つあるんですね。そして陛下が「掛けてください」「お茶でもどうですか」とおっしゃるのです。御所に入つて一週間足らずですよ。そして一対一で丁重にいろいろお聞きになるんですね。そのときのお話し方。未熟な、まだ侍従を始めたばかりの私を一人前の人間としてとても温かくお迎えていただいた。本当に心から感激い

たしました。

お部屋に入る途端に何か温かい、包まれたような。皇后さまもそうでした。やっぱり特別なお方だなという感じがしましたし、私が二年侍従でお仕えして、いろいろ失敗したこともあります。でも、怒られたことは一回もなく、いつも温かくご指導くださいました。

侍従の役割の一つとして両陛下をご先導することがあります。

あるとき宮殿をご案内して、行事の行われるお部屋を通り過ぎてしまったことがあります。すると陛下が、「楠本さん、ちょっと違うんじゃないの」とご指示いただきました。エレベーターに乗ってどこかのボタンを押せばドアが閉まるのかわからず困っていると、「ここを押してみたら」とお示しいたいたり、いつも非常に温かく接していただいた。それが私の忘れられない印象となりました。

そういうお気持ちで一人一人の日本の人々と接しておられるんだな。そういう心配りとか、やっぱりそれは特別なものだと思います。

装束のことですが、祭事では陛下は黄櫨染御袍という束帯をお召しになります。祭事によってはもう少し簡略な、御直衣をお召しになったり、大切な新嘗祭のときは、御祭服という、純白の装束をお召しになります。

重要な祭事るときは専門の方に着付けをしていただきますけれども、通常の祭事るときは侍従が、お服上げといいますけれども、陛下にご装束をお付けしました。

一人の侍従が陛下の前について、もう一人の侍従が陛下の後ろに付いて、二人でお服上げをいたします。陛下のお身体に触るわけですから、初めは手が震えました。そのときも陛下が、「そんなに緊張することはないよ。

いつものとおりでいいよ」とお言葉を掛けていただいたりしました。

ただ、御拝礼のためお部屋から外にお出になると、真剣なご表情に変わります。そういうお気持ちの切り替えに接すると、いかに天皇の祈りというものを大事にしておられるかを感じました。

掌典の場合は普段は白の装束を付けます。重要な祭事の時には、黒い束帯を付けたりします。

一年間に何回か陛下の勅使が神社に遣わされます。京都ですと賀茂社とか石清水社とか。伊勢の神宮については神嘗祭、新嘗祭などに勅使が派遣されます。

○久禮 例えば私たちが明日から奉仕して着付けをしろと言われても、とても無理だと思います。先生は侍従で入られてから、何か勉強会でずとか指導を受けるとか、そういうことはあったのでしょうか。

○楠本 私の場合は、まさに現場対応というか、その都度教えてもらい覚えていきました。それから、お祭りがあるときは潔斎、事前に身を清めることを重要視します。お祭りの当日は、まず身を清めます。それで御殿に上がってご奉仕するのです。

○久禮 着付けの場合には実際にやってみるということでしたが、例えば、亀卜のやり方とか祭祀の仕方とか、そういうことについては、マニュアルをわたされるとか、何らかの引き継ぎはあったのでしょうか。

○楠本 今回の御大札の主な行事、大嘗祭の儀をはじめとしていろいろな儀式については平成のときの詳細な記録が残っていますから、それを参考にしました。具体的な部分については、何回も練習を積み重ね研究しました。

それと共に、掌典職ほか過去の記録を、天武天皇の頃までさかのぼって研究をしました。亀卜についても残っている限りの記録を見ながら、どういうふうにひび割れを、どう解釈するかとか、調査研究を積み重

ねました。

それと大嘗宮の建て方。これもいろいろ、明治以降は細かく書いてあるんですが、材料的に手に入らないものもあったり、現状ではその通りできないこともあります。

そういうことを勘案しながら、現状において、国民世論あるいは政府の方針、予算というのを勘案しながら、最低限本質を守りながらやっていく。そういうアプローチでしたかね。

○久禮 ありがとうございます。「大正大礼記録」は当時作成されたものが宮内庁と国立公文書館にあります。国立公文書館所蔵のものを所先生が臨川書店からマイクロフィルムで出されています。私もこの前必要があつて見ておりましたら、大正のときには、まず明治のときの先例をまとめられて、そこから大正の記録を作成されているんですね。毎回整理されて、それを次の世代が参照しているということを非常に興味深うかがいました。

また上皇陛下のお話で「お茶をどうぞ」という話にちなんで思い出しました。確か平成二十五年(二〇一三)に、所先生の奥さま、所京子さんが後桜町天皇の二百年式年祭に先立って、当時の天皇陛下へのご進講に御所へ招かれた時、緊張している京子先生に陛下が「お茶をどうぞ」と仰ったので、素直に頷かれて緊張が解けたそうなんです。そんなエピソードを書かれた随想集『ゆづりは』を以前見せていただき、陛下のお人柄、お心遣いを知ることができました。

お二人ともいろいろお話をいただいてありがとうございます。最後にこれだけはどうかなということがありましたら、お一人ずつお話をいただきまして、締めとさせていただきます。所先生からお願いいたします。

○所 今日こういう機会を「むすびわざ館」と日本文化研究所により開催してくださり、まことにありがたいでございます。あえて申せば、京都に数多くある大学でこういうことをもつと積極的にやっているところは、あまりありません。ところが、大正と昭和の御大礼に際しては、京都帝国大学が大々的にいろいろなことをやったのです。たとえば三浦周行博士は率先して『即位礼と大嘗祭』という啓蒙書を京都府教育会から大礼以前に出しておられ、それが京都の人々、全国の人々に非常に大きな役割を果たされたとみられます。

このように、先人たちは、京都で大礼が行われる意味を深く受け止められ、いろいろなことをやってこられた。それが戦後の平成と今回の令和には、もちろんいろいろな方がいろいろななかたちで努力なさいましたけれども、大学や研究所で本格的な取り組みは見られませんでした。

それは世の中が変わったから、やむを得ないと言えばそれまでです。けれども、それを何とかしてやってほしいという私どもの思いを、井筒企画などが受け止めてくださったおかげで特別展『京都の御大礼』などを実施することができました。

それでは、次の大礼に向けて、いったい今から何かできるかを考えてみますと、いろいろあるのです。自分にもできることはあるのですよ。たとえば、アワを家でいっぺんつくってみてください。ある方から先ほど内々でお聞きしたことです。新嘗祭のアワをお供えになった後、そのお下がりアワ団子をつくられ、それがとてもおいしいんだそうです。アワはおいしいんです。でも、いま需要が少ないため、せいぜい大阪の粟おこしくらいしかなく、それも大半外国産とみられるのが現状です。けれども、もつと皆でアワを作り広く活用できるようにしてほしいと思います。ただ数年前に私は少し作ってみました。結構手間ど、令和に入ってから家内の介護に追われ中断しています。

各々やろうとすればできることがいろいろあります。何でもそれをお互い心して、政府や宮内庁まかせではなく、われわれ一般国民、とりわけ京都にゆかりのある者として、できることをやっていくうちに、結果として次の御大礼へつながっていくようなこともなるかと思われれます。

とりわけ、今日いろいろのお話を承りました、祭祀、お祭りの大切さを理解するもの難しいことではないんです。われわれが毎日食事をいただけるのは、まさに天地自然のおかげでしょう。その食物を私どもは餌(エサ)と言わないで、食べ物と言っているのは、天、自然からの「賜り物」だからです。

それが賜り物ですから、まさに「いただく」というのです。決して横からエサを取るんじゃないで、上から神々からいただく「たまわりもの」であり、ごく自然に「いただきます」というのです。われわれは日々の食事を通して食べ物に感謝する祭りをしていくことになります。

われわれが生きておられる、生きていけるため天地自然の恵みを賜っているのですから、それに感謝する気持ちを日常的にやることは、宮中の新嘗祭にも大嘗祭にもつながるといふ思いを持って、日々それをしていく、あるいは家庭でも学校でも実践していく、ということがあつてほしいと思います。

○久禮　ありがとうございます。楠本先生、いかがでしょうか。

○楠本　今日は私の侍従としての体験、それと掌典長として御大礼に携わらせていただいた体験を踏まえて、天皇の祈り、宮中祭祀。天皇のご存在の中に日本がいま抱えている課題、将来解決すべき問題の解決のため何か重要な鍵というヒントが隠されているんじゃないかなということを申し上げました。

私も外務省で世界情勢をいろいろフォローしてきた経験がありますけれども、これから十年、二十年、われわれが予想しないようなことが起こる可能性は十分あるんじゃないかと思っています。

明治維新から先の大戦の敗戦まで七十七年なんです。幕末にペリーが来て大騒ぎとなり、近代国家をつくって、植民地にされずに生き残った。ただ、その後、残念ながらあの悲惨な戦争になり、原爆まで落とされ、全てゼロになった七十七年間なのです。そして先の戦争から今日まででちょうど七十七年なのです。

明治維新から先の大戦までの七十七年が第一期。先の大戦の終戦から今日までの七十七年を第二期とする、これからの第三期はどうなるのか。そういう意味で、日本のこれからの進むべき道というのは非常に不透明で困難と思われれます。

経済力も随分低下してしまいました。アメリカ・モデルの後を追っていいという時代ではないです。日本人自身が、自分の国のことをどうあるべきか。どう生き残っていくのか。改めて真剣に考える時期にあると思います。

経済面でも環境が悪化し不作になって、食糧危機が来る。感染症も広がっていく。こういう中でどう生き残っていくのか。

日本人というのは集団主義ですから、いままでは誰かがやってくれるだろうとの意識でやってきた。ところが政府だつて当てにならない事情になっています。国債で膨大な借金まみれになっています。これからは頼れるのは自分だけということになるんじゃないでしょうか。

人生をどう生きるのか。これにはいろいろな考えがあつていいと思うんですが、この大切なことを考えるのはそれぞれ一人一人ですよ。こういう自覚を一人一人が持たざるを得ない状況になっているのではないのでしょうか。

それぞれの人が自分の人生をどう生きるかについて考える際に必要なのは、心の余裕です。心のゆとり、

心の安定がないとそんなことは考えられないです。私はそういう深いことを考える世界の中に宮中祭祀の本質があるのではないかと思います。

陛下は、いつも日本のこと、日本国民のことを考えておられる。社会不安をはじめいろいろな不安の中で、物欲にかられてモノあるいはカネを追い求めるんじゃないかと、ここは少し立ち止まって、これから自分の人生をいかに生きるべきかということをも自分で考えてみる必要がある時期に来ているんじゃないか。

また、戦後、敗戦から七十七年間に培ってきたいろいろなシステム。例えば会社のシステムとか、社会保障のシステムとか、これがいま壊れかけています。このような問題を行政や政治に任せておいてもうまくいかないと思います。

今後は一人一人がどうするのがいいのかをよく考えて、政治や行政に関与しながらシステムを変えていく姿勢が必要と思われます。

それと共に重要なのは意識改革だと思っています。まずこれまでの意識を変えなければならぬ。意識を変えするためには、申し上げたように心の安定とか余裕がなければならぬ。そのためにも必要なのが祈りの心とか、あるいは和歌の心とか、精神的なものですよね。

日本は長い歴史に裏付けられた世界に誇るべき精神文化を持っています。これまでのように欧米の物質文化ばかりを追い求めるんじゃないかと、日本の生き残り、日本人一人一人の生き残りのためにも、超越した何か大いなるものを感じながら、何かそういうものに身を任せながら、自分の人生をいかに生きて行くかを考えなければならぬと思います。

チャンスを待ちながら自分で最善の準備をするということですかね。そういう生き方がこれから求められ

ていく。このことを考える際に、国安かれ、民安かれとの天皇の祈りを身近に感じる時代が来ているんじゃないかなということ、私の結論としてさせていただきます。

○久禮 どうもありがとうございます。先生方、非常に貴重なお話をありがとうございます。

まだギャラリーは開いておりますので、どうぞ展示をご覧いただいております。今日、所先生から、続けていくための努力というのは大変であるが、続けていかねばならないというお話がございました。

今回の展示は、京都宮廷文化研究所と井筒が持っているものですが、一つには大正・昭和の皇室ゆかりの品を、継承してきたものです。

もう一つは、井筒が中心として、衣装や染め物といった、まさに昔行われてきたことを、いま同じようにできるのかということで復元したものです。古いものをそのまま受け継いでいくこと。そしてもう一つはかつて行われ、伝えられていることを、もう一度この時代に復活させること。それがあの展示品から感じただければと思います。

関連イベントは七月にもう一度ございます。本日、外から支えられた所先生、内から支えられた楠本先生にお話いただきました。お二人とも平成、令和ともに御大札と皇室を支えられたのですが、もうお一人、大事な方が今日会場にいらっしゃっています。

元宮内庁京都事務所首席主殿長で現在井筒にお務めの岡本和彦先生です。岡本先生には七月に十二単の着装をしていただきます。その際にたくさんお話をされると思いますが、よろしければ先生、一言お願いします。

○岡本 来月三日の十二単ですが、いわゆる十二単への着装と、それに基づきましてその十二単の内容等を

詳しくご説明させていただければと思っております。

第一部、第二部に分けましてお話しさせていただきます。十二単というのはあくまで俗称で、いつづめからぎぬも五衣唐衣裳というのが正式名称でございますね。いわゆる十二単が、どういうものかというのを平安の時代からの変遷で現在に至るまでを見ていただき、考えていただければと思います。

いわゆる十二単は、十二世紀の後半にはもうほとんど着ることがなくなってしまいました。着ることが大変なんですね。詳しくは、三日にお話しさせていただきます。

先生方も私も即位、大嘗祭。裏方の裏方で奉仕させていただきました。大変貴重な体験になりました。昭和さんのお隠れから平成、令和と全部奉仕させていただきました。全て衣紋者として奉仕させていただきました。いろいろなことを学びまして、大変貴重な体験だったと思っております。これはあくまでも感想でございます。

○久禮 岡本先生、ありがとうございます。今後とも京都産業大学と京都宮廷文化研究所をよろしくお願いたしますということで、このシンポジウム「平成と令和の大礼を振り返る」を締めさせていただきます。所先生、楠本先生、ありがとうございます。

第25回企画展

女子 宮廷装束の華

2022.
5.18 (水) ~ **7.9** (土)

月・火・木~土 10:00-16:30 水 13:00-16:30 **入場無料**

※入館受付は16:00まで
日曜、祝日は休館。但し、6月19日、7月3日は開館 [10:00-16:30 (入館受付は16:00まで)]

京都産業大学ギャラリー [京都市下京区中堂寺命婦町1-10
京都産業大学壬生校地むすびわざ館2階]

シンポジウム

平成と令和の大礼を振り返る

【講師】 所 功 氏 (京都産業大学名誉教授・京都宮廷文化研究所特別顧問)
楠本 祐一 氏 (前宮内庁掌典長)

【司会】 久禮 且雄 氏 (京都産業大学法学部准教授・京都宮廷文化研究所代表理事)

公演

女子宮廷装束 ~十二単の着装実演~

【解説】 岡本 和彦 氏 (元宮内庁首席主殿長・井筒)

※詳しくは裏面をご確認ください

① 「公家女房 裾帯比礼の物具装束(平安時代)」

② 「女官礼服(奈良時代)」

③ 「公家女房 晴れの装い(平安時代)」

画像提供：京都宮廷文化研究所

主 催：京都産業大学ギャラリー
特別協力：京都宮廷文化研究所，井筒企画

むすんで、うみだす。
京都産業大学



日本文化研究所・並松信久所長挨拶



京都産業大学ギャラリー・石川登志雄室長挨拶



